



79篇と83篇、(79)異邦人に攻撃されてエルサレムが荒らされている。こちら(83)も「異邦人が攻撃してエルサレムが荒らされているという79篇と83篇。主の名の家が荒らされている。

80篇と84篇は、万軍の主よ、万軍の主よ、万軍の主よと出てくる似ているものです。「万軍の主よ、帰ってきてください。私達を返してください」というようなことで、主も民も家に帰るということでまとめました。

それと、85篇、87篇は、ヤコブを回復させてください、ヤコブからすべてのものが生まれるという共通点です。

86篇と88篇は、よみから救われる、死から救われる。墓から、よみから。たましいがよみからというようなことで、86篇と88篇は、よみから再び生きるようにされる。85篇と87篇は民が再び生きるようにされるというようにまとめられるでしょうということです。

そして、まとめたものの関係を見ました。そもそもマナの与えられた意味は何だったろうかということですが、私達を食べさせて生かすためだった。エジプトで死んだほうが良かった、食べ物が無いと騒いだ人達に対して答えたのが、「わたしはあなたがたを生かします」ということでした。このマナの降ってくる場所は、出エジプト記16章にあります。この中でとても強調されているのが、6日目には倍降って、7日目は降りませんということが、このマナのストーリー、マナの降ってきた教えの中で、とても強調されているところなのです。神様はマナを食べさせて生かしてくださいませけれども、その全き休みの日、聖なる安息、そのときには、もうすでに取ったものを食べているというくらい安息なわけです。そのことを教えてずっと導きますということなので、このマナ、食べ物を与えてくださることと、安息日を聖なる日としているということが、一緒に考えなければいけないものとして言われているものだと思います。

もともと。それが、神様の聖なる名を表す出来事である。聖なる名を褒め称えるのが安息日である。それは、創世記の最初の7日目に聖であると宣言されたというところから始まっています。その聖であるということを民に教えてくれるというのは、共に住んでいるよ、一緒に住んでくれる、シャロームを与えるよ、幸いを与えるよというところ(85・87、80・84)であらわされていると思います。

それに対して、主の名が聖である、聖い神様の名前をあらわすほうが、79篇・83篇、86篇・88篇。ちょうどこの79篇、83篇、86篇には、「主の名」という言い方が3回ずつ出てきます。もう一回出ている、84篇に1回出ているだけです。それと、86篇5節と15節には、主の名をもっと細かく、「恵み深く、いつくしみ深く、怒るのにおそい」という出エジプト記34章で宣言された主の名がここに書かれていますので、特に86篇は、「主の名」。88篇は、名前は出ていないのですが、主の名を呼ぶということが、救いの出だしになっていますので、その意味で主の名というのがこちら(79・83、86・88)のテーマでしょう。

こちら(85・87、80・84)は、シャローム、生かされる、生まれる、共に住んでくれるということですので、こちらが安息日を守りなさいという第4番目。こちら(79・83、86・88)は、死から救ってくださって聖い命を与える神様だということと3番目という十戒の3番目と4番目が大きな枠組みになっている。

それは、マナのつぼということであらわされています。3戒と4戒をあらわす全体の構成で、この十戒の板の中とマナのつぼの出来事が並行して教えられているということだと思います。右側のほう(79,83,80,84)は、家の話をしています。左側のほう

(85,87,86,88)は、民の話をしています。どちらかというと、いのちの話、いのちの心配をしている感じです。79篇からのところの真ん中のところは、安息の家に戻るということが強調されていると思います。85篇から88篇の4つの分析は、別の6月15日のまとめにありますので、そこを見てください。全体の第3巻の流れが、契約の箱の中の3つのものと、その前で祈る祈りということで構成されているのだろうと思われま